
いつかその手を離すとしても

片桐ゆかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかその手を離すとしても

【Nコード】

N2483BA

【作者名】

片桐ゆかり

【あらすじ】

好きだった、違う人を愛しているのだとしても。

最愛の人をなくして生きることを放棄しそうになる男の傍で生きてほしいと願った。こっちをみてくれなくてもいいから、ただ歩いてほしいと。

その手を離すときが、この恋の終わりなのだと思っ

近いようで微妙な距離の二人が友人から恋人になるまでの話。

登場人物

・笹原郁

高校教師。神崎とは中学校からの仲。昔から神崎を思っているが神崎には伝わっていない。

神崎が桜をなくし傷付いたときから今までそばにいて支えている。頼れる姐さんタイプで後輩や生徒から慕われている。

神崎とのことを一時的にでも忘れられる酒を飲むのが好き。

・神崎雪斗

高校教師。笹原とは中学校からの仲。

高校時代恋人をなくし、その相手が自分とは遊びだったと知り生きることが放棄するようになるが笹原が何かと世話を焼いたおかげで生きている。そのことで笹原には感謝している。

性格は冷たいが一度懐に入れた相手は無条件で信じ甘やかす。

・仙道春樹

笹原、神崎の高校の後輩。

笹原に懐いている。神崎の過去を知る一人でもあり、同時に笹原の思いも知っている。笹原には幸せになってもらいたいと思っっている。

神崎への心象は最初は悪かったが最近はそのでもない様子。

笹原とよく飲みに行ったりパシリに自発的になっている。

・林原あかね

高校養護教諭。

笹原の親友。神崎と笹原の事を知っている人物。ゆえに神崎への感情は友好的とはいえない。

笹原に幸せになってもらいたいと常に考えている。

神崎に対する言動は厳しめ。

神崎の方が笹原に依存しているとみている。

・坂上桜

神崎の元恋人。事故死。

婚約者がいながら高校生の神崎と遊びの恋をしていた。婚約者と外出中に事故に巻き込まれ命を落とす。

なかなか婚約者と会えない寂しさから好意を持ってくれた神崎と関係を持つようになる。神崎の事は本気ではなかった。

・塚本

坂上桜の婚約者。事故死。

・坂上諒也

高校教師。桜の弟。

姉が神崎と遊んでいたことを知っている。神崎が桜に婚約者がいたことを知らなかったと知り罪悪感を感じている。

笹原を憎からず思っている様子。

そのことからか神崎との関係は微妙。

ある日の昼時

人とはわからない。人間の本心を見抜くことは難しい。

本人が言ったことが本心であるなどと誰が決めたのか。

少し変えるだけ、偽りは知らないうちに真実へと変わる。本質は歪む。それが真か偽りか、それは本人にもわからないままに。

彼が抱える事実を、私は事実としてのみ知っている。そこにあるあの男の感情を自分が知りたいのかはわからないが、ただあれの思想は時たま不可解だった。

誰にでもあるだろう。全てを解りあえる存在などそうそういない。

長い付き合いだ。あの男を放っておけないのは私があつた男を好きだからだろうか。果たしてそこに、それ以外の何か感情はあるのだろうか。

残り僅かなコーヒーを飲み干した。

知ったような口を

俺の全てがわかるとでも、本気で？

いつだったか勇気を振り絞って想いを告げた生徒にあの男が淡々と言い放った言葉を私は思い出した。

激情もなにもない、ただ静かな口調。けれどそれは遥かに深く痛く、鋭い刀だった。

その会話をぼんやりと聞き流しながらもあの男はいつまでも過去に

囚われたままでいるつもりなのだろうと漠然と思ったのだ。泣きながら去る生徒、気付かれずにすんだとほっとしながら死角から男の近くへと寄ったあの日のように、今もまた私は静かに煙草をくわえながら歩き寄った。

「窓を開けて吸え」

「それは失礼。窓開けるだなんて珍しい。いつもは開けないでしょう」

「ならどこかで吸ってこい」

「ジョーダン。今喫煙者ってだけで煙たがられてんのに外の、それも高校で開けっ広げに吸ってたら怒られちゃうじゃない」

「どこで吸おうが誰に怒られようがお前は特に気にもとめんだろっが、郁」

「ま、それはそうだけど。にしても随分ご機嫌ななめねえ？私の名前を呼ぶなんていつぶり？」

「お前の仕業か」

「あら確認が必要？あんなに開けっ広げに笹原郁って印を残してあげたじゃない」

怒りをあらわにするのは珍しい。いつもこの男は感情を殺している。だからこそ、たまにガス抜きをしなければ壊れてしまうのだ。

故に、わざと私は神崎雪斗をおちよくり、怒らせている。ためこむばかりじゃ体に悪い。

全く、友達思いも甚だしすぎて涙もでてくるくらいの健気さだ。誰か褒めてくれてもいいんじゃないかなかるうか？

「いい加減にしると何度も言ってるだろう」

「そう怒らないですよ。煙草も吸えやしない」

「お前は馬鹿か」

神崎雪斗は気付いていないだろう。

誰よりも聡く傷付き易く潔癖で更に周りに一步距離を置き慎重になる癖に、一度心を許した人間に対しては他人に対することを一切排除する。神崎の懐にいるものを、神崎は信じ、そして自分からは見捨てない。疑わない。決して。

「雪斗、悪かったたら。機嫌直してよ」

「……2ヶ月昼飯奢れ。それでチャラだ」

「うつわー、えげつなー。薄給にして酒飲みの私にそれやる？ねえ鬼なわけ」

「だったら最初から馬鹿げたことをするな」

「やあよ」

「……」

「2ヶ月昼ご飯奢りかあ、きついわ。仙道辺りにたかる？あいつ飲み代とか軽くだしてくれるはずよね」

「……どつちが鬼だ。しかもそれはお前を慕ってる後輩だろう。可哀相なことをしてやるな」

「お酒は私の人生行路のパートナーなのよ？それに仙道は郁先輩にならいくら遣つても後悔しないっス！馬車馬のようにこき使ってください！ってまさかのDM発言されたのよ？これはもう存分に使うてやるしかないじゃない」

「笹原、お前は どうして危ないヤツに好かれるんだ」

「知らねーわよ。まったく、高校教師よりいい仕事ないもんかしらねー」

「俺に言うな。お前の酒代に消える金で俺は十二分に生活出来るしむしろ貯金もできてるぞ」

「あんたに物欲ないだけじゃない？」

「酒をやめれば済む話だろう」

「人の気も知らないで無茶苦茶言わないでよ。これはもう麻薬みたいなもんよね。とまんないしやめられない」

「笹原がアルコール依存症になったら遠慮なく笑ってやろう」

「そうね、それもいいかもね。酒の事しか考えられなくなるんだものね」

「…末期だな」

「知らなかったの。それよりご飯まだでしょ、行くわよ」

男の白衣をずると引つ張り歩く。

この男は最近物を言わずとも自分から食べる様になった。それは偉い進歩である。

あの時、高校生だった神崎は最愛の人を亡くしている。

高校生の神崎はひよんなことで出会った大学生の女性に恋をして、そしてその人と関係を持つようになった。一番近くで見ていたからわかる。あの時神崎は私には決して見せることのない笑顔で笑っていた。私以外の、人に向けた。

けれどその表情はすぐにみることでできなくなった。交通事故で神崎の恋人が死んだからだ。そして彼女には本命の婚約者がいてその婚約者とともに亡くなったのだと、自嘲気味に笑う神崎から聞かされた。あの時の絶望は、傷はどれほどのものだったのだろう。愛した人から愛してもらえない傷。愛した人に遊ばれていた事実。どうしてこんなに傷つけてそれでもまだ神崎の中に居座って、と何度もその人を私は詰った。心の中で何度も、憎んだ。

それからの神崎はいつも死に急ぐように死に切れないまま生きることを放棄して生きていた。

隣で私はただみていた。

私は見るといふ選択肢しか与えられなかったのだ。

偶然同じ大学へ行き教員免許をとり同じ高校で科学やら生物やらを

教えている。私はただの同僚だ。
いずれ、私の手がいらなくなるまではみてやるうと思っていたが、
そろそろ手を離してやっても大丈夫だろうか。
神崎の手を離すときが私の恋の終わりなのだ。叶うことなど一生来
ない夢を私は中学生のころから抱えて、消せない思いを抱いている。

「笹原」

「んー？」

「食堂はこっちだ」

「いけないいけない、周りみてなかったわ」

自己犠牲も甚だしいがまあ致し方あるまい。

私は神崎雪斗との友人としての生活も気に入っているのだ。たとえ
それが、悲しかろうが。

「笹原」

「なによ」

「俺は生きるしかないのか」

「死にたいわけ？」

「わからん」

「あんたが生きたかろうが死にたかろうが知ったこっちゃんいけど。これ、おいしそうに見える？」

ずい、とスプーンにのせたカツカレー（一口）を神崎の目の前へ。

「ああ」

「じゃあ生きるべきよ。あんた自身は否定するかもしれないけど、身体は生きること求めてるんだわ」

「……」

「あ！？」

むんずと掴まれた手。スプーンが神崎の口の中に入り出た時には乗っていたカツカレー一口分は綺麗に消えていた。図らずも間接キスげつと、である。いや何回もやってるから今更気にはしないのだけど。

「笹原」

「…なによ」

「うまかった」

「…そーでしょーよ」

食べ物の怨みは恐ろしいのだ。このカツカレーは私の好物で一口やるのもおしいくらいなのでむーとしたまま返事をしてやった。

「お返しだ」

「ふん、」

「お前な、今時の高校生の方が大人だぞ」

「食べ物の怨みは恐ろしいのよ！」

「郁」

「っ、げほっ、」

「何故噎せる」

「あ、あんたご機嫌ななめるときくらいしか名前呼ばないじゃない何なのよ?!」

「気分だ」

「そうでしょうとも、ええ。気分でしょうとも。びっくりした死ぬかと思った」

「それは困るな」

「はあ？」

「お前にはまだ死んでもらいたくない」

だから、そういうのやめろってのに。

押し込んだ感情でてくるでしょーが。

私はその言葉を辛うじて、口に含んだカツカレーと共に飲み込んだ。

例えばこんな出来事でも

笹原郁の一日は煙草を吸うことではじまる。

昨日飲んだまま放り出した缶ビールを顔をしかめながら洗ってゴミ袋に突っ込んだ。もちろん潰して。いっぱいあるのに、潰さなきゃ入らないのだから。

寒いと思ったら雪が積もつたらしい　室内の温度がマイナスつてどうよ。寒さを自覚したからか、がたがた震える身体を温めようと暖房のスイッチをいれる。

さすがにワイシャツ一枚は自殺行為だったかもしれない。昔間違っ
て買った男物のワイシャツは一枚で着て丈の短めなワンピースみた
くなるから楽なのだ。誰も来ないし。

しかしちっとも温まらないので風呂にでも入ろうかと立ち上がった
ところで携帯がなった。

「はいもしも　、　」

『郁先輩生きてますか！』

「…仙道、ちったあ声抑えなさいよ！耳が痛いじゃない馬鹿」

『うお、久々の郁先輩の罵声。うれしいっつーか痺れるっつーか。
先輩なんなんすか？』

「あんだこそなんなの」

開口一番生存確認をした挙げて存在まで謎にしゃがったんだからないけど昔から私を慕って（いるらしい）後輩、仙道の声にいらつきながらも懐かしい気持ちになる。久々に声を聞くからだ。

昔馴染みとの会話は意外と楽しい。

神崎雪斗もそういえば昔馴染みに入るのだと苦笑した。

昔馴染みの部類にいれるなんて嫌なくせに。

友人の枠にこだわりつづけるのは安全地帯だからかもしれない。

友人ならば、隣に立っても許される。

「それで？何か用事？」

『先輩これから何か用事あります？特に用事ないんなら飲みませんかーってお誘いに。良いワインたくさん貰ったんで貢ぎにきました。で、俺今先輩の部屋の前なんすけど』

「ストーリーカーかお前は！」

しかしよくやった仙道、流石。褒めてあげよう。とりあえず私お風呂入りたから入って待ってて」

『え、先輩それ誘ってますよね』

「誘ってねーわよ馬鹿。どこら辺が誘ってんのよ。ああ、寒いのが好きなら一時間くらい外にいる？それはそれで一向に構わないわよ」

『すみません！寒いですが、寒いのがやです！馬鹿みたいな期待してほんとすみませんだからいれてください郁先輩、って神崎先輩？』

『！』

「は、はあ？」

『うわ、奇遇っスね！先輩んちここなんですか？え、郁先輩に用事？ああじゃあ一緒にいれてもらいましょうよ。郁先輩ー、あけてくださいー』

朝っぱらからうるさく喚く馬鹿に頭痛を覚えながら私はドアを開ける。一発仙道にぶち込むのも忘れずに。ひんやりした冷気につわと引き攣れば神崎が馬鹿かとキレていた。

「何でいんの？」

「ってか先輩やばいつスよその格好。なんでワイシャツ一枚？つか俺とか神崎先輩意外が来たらどうすんですか、お持ち帰りか中で強制的にあれっスよ！」

「あんたらがいたから出ただけだっつーの！別に今更でしょーよ。ほら、近所迷惑だから入って。適当にはじめてていーわよ。風呂行くか、ら……………」

「え、神崎先輩？」

「悪いな仙道。今日は外せ」

「うっわ了解しました！これ置いとくんでとっといってくださいね郁先輩！」

ワインをおいてはびゅんと消える後輩。
残るのは私と、私の腕を掴む神崎のみ。
え、どういうこと？

疑問符を浮かべたままの私を部屋に押し込めて神崎が睨みつける。
ばたん、としまったドアの音がいつもより大きく聞こえたような気がして肩を竦める。

暖房が利いた部屋は暖かい。

「郁、もっと気をつける」

「…この格好で出てったのは謝るわよ」

「だったら、」

「でもあんたらじゃなきゃ開けないしあんたらだから大丈夫だと思
ったのよ！というかあんたは私のお母さんか！」

逆切れも甚だしい。いやでもこれは本当に私が悪いのだけど、なん
だか我慢が出来なくなってしまうたのである。こっちの気も知らな
いで心配なんてしないでほしい。余計好きになってしまう。好きな
んて言わせてくれないくせに。

報われない恋なんてないと思っていた。いつか必ず叶うのだと信じ
ていた、馬鹿な私はいつまでたっても馬鹿なままで、かなわない恋
が自分の前にあるのに知りながらどこか他人事のように思っていた
のだ。そう、近すぎる。友人として立つことを望むのに、私の中の
女がそれを邪魔する。

ああ、酒が飲みたい。飲んでやろう。泣きそうに歪む口元を背を向

けることで誤魔化して、神崎に背を向けて廊下へ出る。仙道が置いていったワインを引っ掴み乱暴に開ける。

「郁、落ち着け」

「せっかく飲めると思ったのに邪魔しないでくれる？」

「着替えてから飲め」

「神崎が出てけばいいでしょ！」

「置いてけるわけないだろ馬鹿が」

はあ、とため息をついた神崎が私からワインボトルを取り上げてグラスに二人分注いだ。

着替えて来い。と優しく言うからその声に逆らえず私は部屋着を取りに行く。神崎がキッチンへ入っていったのがわかって、唇を噛みしめた。

優しくするなバカ。言葉が言葉にならなかった。胸が痛くてシャツを握り締めながら溢れそうになる涙を袖で乱暴にぬぐった。

期待なんてするもんじゃないのに、特別なのではないかと感じてしまっ

特別なんかじゃないのに。

顔をばしゃばしゃと洗って頬を叩く。大丈夫、こんなのは慣れっこだ。

部屋に戻れば神崎がソファに座っていた。

テーブルに置きっぱなしの携帯をとって電話をかける。

「仙道？今から飲むからいらっしやい！早く来ないと飲んじゃうわよ」

『郁先輩のお誘いなんて断れるはずないじゃないっすか！今すぐ行きます飛んでいきます』

「いや、飛ばなくていいから」

『……大丈夫っすか』

「だから飲むんでしょ！」

ごめん、手のかかる先輩で。そう思いながら電話を切ってワインを一息に煽った。

呆れたような神崎がゆっくり飲めともう一杯注いでくれる。

今度はゆっくり味わいながらワインを飲む。

今日のこの感傷を流してほしい。私はまだ大丈夫だ。ソファに隣り合って座りワインを注ぎあいながら飲む。この距離はほんとに男友達みたいだとほんのり酔った思考で思った。

仙道が来てそれからたくさん飲んで、ソファに寝転がってもっと飲みたいと手を伸ばしたところで私の意識は途切れたのだった。

「……だからほっとけない」

「あー、やっぱり寝ちゃったんすね」

「飲み過ぎだ馬鹿」

神崎が笹原に毛布を掛ける様子を見てオレは誰のせいだよと心の中で呟いた。

この二人には幸せになってほしい。でも、オレは誰よりも郁先輩に幸せになってほしい。

酒を逃げ道にすることがないように。一人で泣いて一人で飲んで悲しさを消すために酔って寝て、それで傷を消した気になってるこの人が早く幸せになってほしい。

オレじゃできないことを、早くしてくれる人がでてきてほしい。神崎先輩がそうなってくれるのが一番いいんだろう。

そう思いながらオレはかいがいしく世話を焼いている神崎先輩を眺めたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2483ba/>

いつかその手を離すとしても

2012年1月6日11時57分発行